

表3-116 給水人口の変化

区 分 \ 年 度	昭和48年	昭和50年	昭和52年	昭和54年
行政区域内人口 ^人	16,023	15,997	15,683	15,748
給水区域内人口 ^人	13,850	14,574	15,058	15,706
1日最大給水量 ^{m³}	3,926	4,243	6,397	

また今後の人口の増加、生活水準の上向などにもなって生活用水の需要増が見込まれ企業団ではこれに対応し、地域内の配管の整備をはじめ諸施設の充実、能力の向上に積極的にとりくんでいる。

第五項 文化 生活

文化生活への移行
戦後の経済発展にともなうて本町が都市化するなかで、町民生活は近代化に向かつて大きな変化をみるところとなった。

一般家庭にはテレビ、冷蔵庫、電気炊飯器、掃除機、冷暖房器具など多くの電化製品が取り入れられるとともに、ガス、水道もほとんど全戸に普及し、家事労働にいられていた婦人はかなり労力的に楽になり、家事から解放され、職場へ意欲的に進出した。

食生活
食生活の変化は戦後の食糧不足から昭和二五、六年ごろになってしだい

に解放され、バター、マヨネーズ、味の素などの科学調味料が多く出回るとともに、冷蔵庫など器具の発達につれて、魚、肉、乳製品なども豊富にいつでも購入できるようになり、食卓には栄養価の高いものが多くできるようになった。

また今日では、インスタント食品、冷凍食品など新しい技術により製品化され市場に出回り、家庭での調理の時間が少なくなるなどの変化もみられる。

このように食生活あるいは、各家庭における器具、施設が完備、向上し町民の日常消費はこれに対応し急速なテンポで進展した。

衣 料

衣料についても変化をみせ、戦時中のモンペから戦後になるや、これがストラックス、ミニスカートに変わり、なかでも若者の服装の中には、色、型など男女の区別さえできないものまで現れ、昔は都会と田舎では衣服にかなりの差があったといわれたが、今日ではまったく流行も同じでこれは感じられない。

また昔の絹物、木綿物中心から最近では化学繊維が開発され、テトロン、ナイロンなどの製品が日常衣服の主要な部分を占めるようになった。なかには「使い捨て」の製品まで出現し補修して再び着用する意識はまったく薄らいできています。

住 居

住居も昔の居住用と農作業用の併用の間取りから、文化生活が進行するなかで、台所改善、住宅改善がさかんに行われ、部屋は明るくなり、ほとんどの家庭では応接間やリビングルームができ、またたたみを中心にした生活様式から板の間や椅子を多くとり入れた生活に変化し、また昔ながらのかや葺の家はまったく姿を消し、かわら葺になり赤、青、みどりのかわらも目立つようになり、鉄骨コンクリート造りの家も今日では建築されていく。

このように衣、食、住生活がそれぞれ変化するとともに、社会一般に労働時間が減少する傾向がみられ、余暇時間はしだいに増大した。今日では多くの企業で、週休二日制の採用が行われ、自由時間が増大しこの利用方法も多様化、個性化し、テレビの視聴、読書など教養娯楽中心からしだいに観光旅行、スポーツのように余暇を戸外で楽しむ人、また自然に親しみその中で休養をしようとする人が多くなった。

また近年のモーターリゼーションの進行は、通勤、余暇の活動、買物などの生活面においても自動車の利用をますますさかんにした。

こうした多面にわたるすばらしい変化、都市化への移行は反面多くの新しい課題も起っている。

最近では、石油供給の不安から石油に支えられた現代生活に「黄信号」が付き、省エネルギー、省資源が要求され、これにつれ諸物価をはじめ公共料金が上昇し、生活の基本となるだけに今後、町民一人一人が行政の力強い指導のなかでいかに対応し、生活の安定をはかつていくが注目されるところである。

家計支出の調査でみる余暇関係の支出割合は、昭和三五年が総家計支出の約一七パーセント、同四五年には約二三パーセント、同五〇年には約二七パーセントと大幅に伸びている。

町民の所得
昭和三〇年代にはいつての経済の高度成長は、町民の所得にも着実に反映し、所得水準ははしだいに上昇し、町民の生活は改善が目立ってきた。

従来、本町の主産業である農業経営による所得の伸び率は低く、所得の増加は、農外収入の増加に負うところが大きく、農業と他産業との所得格差が拡大するにつれその依存度はますます高くなってきている。

表は統計資料によるものであるが、その増加率は昭和四七年を一〇〇とし、同五〇年をみると一五二・七パーセントを示しているが、将来は、経済の伸長と相俟って本町の生産活動も当

表3-117 町民個人(1人当たり)所得の推移 (単位：千円)

年 度	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年
大口町	707,704	781,565	900,183	1,194,033	1,371,000
愛知県	728,039	917,915	1,113,828	1,234,878	1,391,000

然大きく伸びるものと考えられ、第三次大口町総合計画では、昭和五八年には町民一人当たりの所得は一五〇万七千円、昭和五〇年の一・二六倍になると推定をしている。

ラジオと
テ レ ビ
大正一四年七月、名古屋放送局がラジオ放送をはじめたが、本町ではおおむね昭和一〇年ごろになってラジオを聴取する家が多くなった。それまでは各地区で一、二軒の財産家にあつたぐらいで、近所の人々が集まりラジオを聴く様子も多く見受けられた。

こうしたなかで昭和一二年の日支事変や、のちの第二次世界大戦がはじまった時代になると、重要な報道機関として普及し、大勢の人々が熱心にラジオ放送に聴き入り、また日常娯楽としても大切なものとなり、ほとんどの家でラジオがきかれるようになった。

しかしその後テレビ放送が開始されると、家庭でのラジオはしだいに姿を消した。

テレビは、NHKが東京で昭和二八年二月より放送に入り、名古屋では翌年から開始されたが、ラジオと同様テレビも当初は非常に高価で、一般家庭に普及するには容易でなく、昭和三五年ごろになってようやく増加し、その後、高度経済成長の進展は人々の生活様式の変化を及ぼすとともに、文化生活への移行を促進するところとなり、昭和三八年には町内でテレビジョン受信契約数一、七一九、普及率約七八パーセントとなった。

昭和三九年に開催された第一八回東京オリンピックは、テレビの普及に大きな役割りを果たしたといわれる。

カラーテレビ放送は名古屋では、昭和三八年一二月からであり、これまでの白黒テレビに代って昭和四〇年代に入つて町内でもカラーテレビが増加し、これまでの白黒テレビを聴取する家は少なくなり、昭和五〇年代になってほとんどの家がカラーテレビとなり、二台、三台と保有する家も現れるに至っている。

第4節 生活と福祉

表3-118 ラジオ聴取契約数の推移

年 度	世 帯 数	契 約 数	普 及 率	備 考
昭和35年	1,871 ^戸	1,710 ^件	91.4%	(昭和25年末 1,338戸、85%)
〃 38年	2,195	326	14.8	
〃 40年	2,329	162	7.0	
〃 44年	2,782	148	5.3	
〃 47年	3,114	105	3.4	
〃 50年	3,577	68	2.0	

表3-119 テレビジョン契約数の推移(普通・カラー契約共)

年 度	世 帯 数	契 約 数	普 及 率	備 考
昭和36年	2,071 ^戸	858 ^件	41.4%	昭和31年10月現在25台
〃 38年	2,195	1,719	78.3	
〃 40年	2,329	2,045	87.8	
〃 44年	2,782	2,519	90.5	昭和45年3月現在 { 普通(白黒) 2,007台 { カラー 635台
〃 47年	3,114	2,757	88.5	
〃 51年	3,679	3,186	86.8	{ 普通(白黒) 304台 { カラー 2,882台
〃 52年	3,782	3,344	88.4	{ 普通(白黒) 281台 { カラー 3,063台

第四章 発展する交通・通信

第一節 交通

道路とその発展

明治、大正時代において幾多の改正により整備されてきた道路は昭和初期、主要道路として町内には下表のような路線があった。

これらの路線が主要道路として交通・運輸の便を支えてきたが、定期的に実施される道路工夫による道路整備のみでは、十分な整備がなされず今日とは比較にならないものであった。むろん舗装された道路でなく、雨天には多くの水溜りができ、また晴天がつづけば砂ぼこりの多い道路であったが、数多くの道路の新設、整備は新しい村づくりの基礎となつたといえよう。

戦後、社会、経済の進展にともない本町は、その地域

表3-120

種別	区分	総路線数	延長
県道		7	24.89km
里道		973	591.33km

表3-121 県道の名称

名称	区分	道路幅	主な経過地区
山那・名古屋線	約	4.0~4.5 ^m	上・中・下小口、外坪
古知野・小口線		4.0	上・中・下小口、河北
柏森・小牧線		4.0	余野、下小口、松山
布袋・楽田線		4.0~4.5	東・西奈良子、伝右、外坪
古知野・楽田線		4.5~5.5	大屋敷、伝右、外坪
布袋・坂下線		4.0	東・西奈良子、長桜、宗雲
古知野・豊岡線		4.0	上小口、河北